

# 対人援助学 & 心理学の縦横無尽

## (34)

### サトウタツヤ

#### 1 はじめに

1年前に、本誌『対人援助学マガジン』第46号において、うわさに関する取材対応をまとめる記事を書かせてもらった。その1年後にあたるこの第50号(2022)では、選挙に関する記事について取り上げておきたい。その時「対人援助学&心理学の縦横無尽(31)」において、最近の私が新聞記者の求めに応じてコメントするときの心構えのようなものを書いておいた。

新聞取材に応じた時、その取材内容が紙面に反映されていないという不満が出る場合が多い。しかし、基本的には報道には報道の自由ということがあるので、どのような文章で記事を構成するか、ということは任せるしかない。それが嫌で多くの人は取材に応じないわけですが、そこは任せる前提でやらないといけない。

サトウタツヤ 2021 対人援助学&心理学の縦横無尽(31)

この心構えは一年たってもほとんど変わっていない。

なお、今回紹介する記事は、いずれも2022年に行われた参議院選挙に関するものである。一つは候補者のコロナ禍における選挙活動の変化に関するもので、もう一つは若者の選挙離れ(投票率低迷)に関するものであった。この二つの話題はいずれも、候補者の行為選択(握手かグータッチか)と有権者の行為選択(投票するかしないか)に関わるものであるから、分岐点分析を適用できる。分岐点分析とはTEA(複線径路等至性アプローチ)の中のTEM(複線径路等至性モデリング)における分析方法の一つである。分岐点とは複数の選択肢が現れることに他ならない。実現された選択肢と実現されなかった選択肢、というようにカテゴリー化すれば、選択肢が二つあるときの選択を描くことができる(図1)。たとえば、コロナ禍の選挙活動において、グータッチを行う候補者にとって「実現したこと=グータッチ」であり、「実現しなかったこと=握手」である。

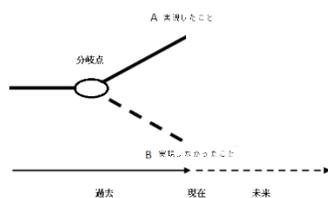


図1 分岐点

ただし、この分岐点における選択は単なる確率事象ではない。候補者がその都度サイコロを振って奇数だったらグータッチ、偶数だったら握手というように決めるものではない（なお、この場合の確率は1/2であるが確率を変えたければ4以下はグータッチ、5以上は握手、というような設定もできる）。

分岐点における実際の選択においては、ある選択肢を選ぶのを促進したり抑制したりする様々な力が働くし、選択にあたって選択者が自問自答したり結果の予測をしたりする。それをTEA（複線径路等至性アプローチ）では以下の図のように表す。TEA（複線径路等至性アプローチ）については様々な専門書が出版されているが、最新刊として『TEAによる対人援助プロセスと分岐の記述』（安田・サトウ、2022）を紹介しておく。

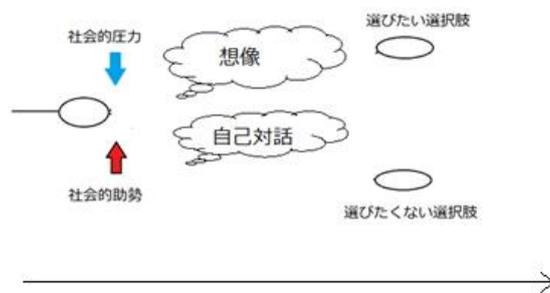


図2 分岐点に働く様々な力

分岐点では、ある選択肢を促進する力としての社会的助勢、それを妨害する力としての社会的圧力が働く。また、自分の選択の結果を想像することもある。さらにはある選択肢を選ぶこと自体について自問自答する場合もあるだろう。自分自身が自分と対話する「対話的自己」が喚起されるのである。

以下では二つの例について新聞取材に対するコメントを交えながら検討していく。

## 2 コロナ禍における選挙活動の変化

「手を握った数しか票は出ない」。そんな格言がある“ニッポン”の選挙。参院選（10日投票開票）は、新型コロナウイルス禍から日常を取り戻しつつある中で行われているが、候補者は握手解禁には慎重で、接触の少ない「グータッチ」が主流だ。この新たな様式は、コロナ後も選挙の風景として定着するか。

『京都新聞』2022年7月6日付 握手自粛「グータッチ」で票はつかめる？ 京都・滋賀の候補者の受け止めは

この記事の問題意識は、これまでの選挙では普通に行われていた「握手」にかわって「グータッチ」が行われるようになってきているが、それはなぜなのか？ということである。たとえコロナ禍であっても、握手の効果は捨てがたいように思われるのに、実際にはグータッチが行われている。そのことについて考察したいというのが取材している記者の問題意識である。

新聞記事によれば、コロナ禍前の選挙においては「握手した人の数しか票は出ない」というフレーズに象徴されるように、ひとりでも多くの人の目をみて握手をしてお願いをするのが「どぶ板選挙」の象徴的な選挙活動であったという。さらに、握手をする有権者一人一人の握り方で自分への支持の強さもわかる、という候補者の声もあながち嘘ではないだろう。

この記事に対する私のコメントは

「価値・記号・行為（新聞記事では行動となっていたが正しくは行為である）で考える文化心理学的に見れば、人々は信頼を得るための手段を状況に応じて選んでいる。選挙の候補者は「衛生的に無防備な人」「強引に握手する人」と思われると信頼を失いかねないので、状況に応じた最小限の「ふれあい」を自ら選択しているのだろう。グータッチはこの2年間で築き上げてきたあいさつ様式で、プロ野球・巨人の原辰徳監督が長年選手とグータッチしている姿から、ねっとりしておらず、爽やかというイメージが世間に広がっている。人間の心理としては適応より再適応の方が難しい。コロナの感染がやや落ち着いてきたとはいえ、日本人がなかなかマスクを外さないのと同じように、2年間していない握手のスタイルはそう簡単には戻らないのではないかと

というものであった。

なお、ここで言う文化心理学とは、より専門的に述べれば記号論的文化心理学である。記号論的文化心理学は、ヴィゴツキーの心理学に由来し、ヴァルシナーによって形成されたものであり、不肖・私サトウタツヤもその活動に加わっている知的な流れである（木戸・サトウ、2019を参照）。

立候補者が目の前にいる有権者に対して取れる行動はグータッチか握手しか無い、と少し単純化して考えてみよう。この時、グータッチを促進するような力や考え方と、握手を促進するような力や考え方が存在する。そして、握手を促進する力はグータッチを抑制する力として働くことになる。

グータッチを促進する力としては「コロナ禍で衛生に配慮する人のイメージ」「プロ野球・巨人の原辰徳監督が行ってきたので爽やかなイメージ」などがあるだろう。また、握手をすることが「衛生観念がなく強引に握手する人」に見えるということもグータッチを促進することにつながったであろう。一方で握手を促進する力としては、「長年の習慣」、「手を握ることによって得られる効果」などがあるだろう。

立候補者が有権者と向き合った時に自身を売り込むために取りうる行動の選択肢のうち、グータッチなのか握手なのか、はそれぞれの立候補者が判断してそれぞれの行動を起こすものであって、決して確率的な事象なのではない（結果的に確率を計算することは可能だが、それはその行為が選択時に確率的に選ばれたことを意味するものではない）。

さて、ここまでは分岐点における選択をプロセス（過程）の観点から扱ってきたが、次にストラクチャー（構造）の問題として考えていきたい。ここでTEA（複線径路等至性アプローチ）の構成要素として自己モデルを表す発生の三層モデル(Three Layers Model of Genesis ; TLMG)が有用である。TLMGは、開放系としての人間が記号を媒介として外界と相互作用する際のメカニズムを3つの層として仮説的に考えるもの（図3）であり、層と層の境目は細胞膜のようなものであると仮定する。中心の第3層は価値、第2層は記号（促進的記号が発生すると考える）、第1層は行為の層を意味する（なお、新聞記事には行動、となっていたが理論上は行為である）。

## 発生の三層モデル

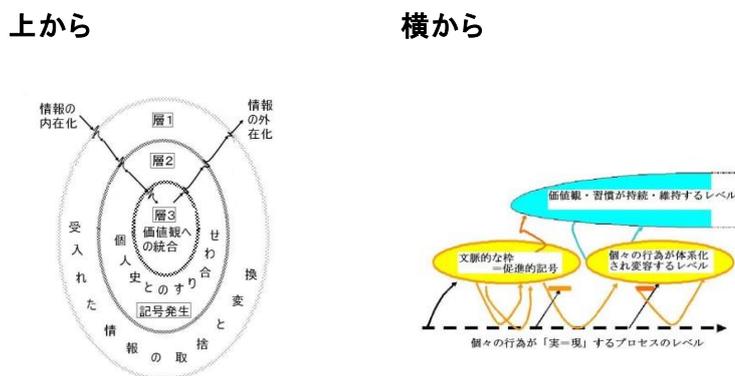


図3 TLMG(発生の三層モデル)

もともと問題になっていた立候補者の二つの行為は、有権者に対して（1）グータッチをするか、それとも、（2）握手をするか、という問題であった。こうした行為は、風が吹いたら目をつぶるといような古典的条件づけにおける無条件反応ではないし、たまたまいくつかの行動レパートリーの中から偶発的に行われるものでもない。立候補者には何らかの価値や信念があり（自身の人柄や政策を立候補者に知ってもらい投票につなげる）、そのために何をするのか、ということにそって行為が選択されるのである。価値が行為に直結して何らかの行為が選ばれるという考え方もありうるが（価値－行為直結

説)、記号論的文化心理学においては、価値と行為を結びつける中間レベルとして記号のレベルを置くのが価値・行為の記号媒介説である。

人はある価値に基づいて何らかの行為をする際、文脈的な枠付けを勘案して記号が発生し(促進的記号)、行為が行われる。ここで文脈とはその時その場の1回性を持つものである。コロナ禍前の選挙運動であれば、迷わず握手をするというのが文脈的な枠付けであったが、コロナ禍における文脈的な枠付けは、グータッチということになる。候補者にとって握手することは目的ではない。自分の人柄をアピールして信頼を得、願わくば自身への投票に結びつけたいということなのだから、握手をすることで衛生観念が無いと思われるようでは本末転倒になってしまう。ここで価値・記号・行為の三層構造において、記号の果たす役割がある程度明確になる。図3の一般的なモデルを選挙候補者の「握手」「グータッチ」選択に特化したTLMG(発生の三層モデル)が図4である。

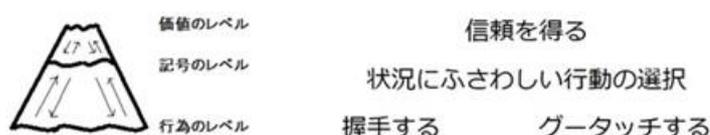


図4 「握手」「グータッチ」選択に特化したTLMG(発生の三層モデル)

コロナ禍における立候補者は、信頼を得るという価値を実現するために、コロナ禍という文脈の枠付けのもとで、何らかの記号を発生させ、具体的な行為を選んでいたということになる。具体的にはグータッチを選んだ候補者が多かった、ということになる。

### 3 若者の選挙離れを食い止めるには 候補者の不実が問題ではないか?

選挙結果とともに議論の対象となる投票率は、10日投開票の参院選でも注視されている。なぜ選挙で投票しないのか。昨秋の衆院選を棄権した有権者の声に耳を傾けてみると、候補者に対する期待の低さや政治への不信感などが投票所に足の向かない要因となっているようだ。投票率向上に向け、識者は投票に至るまでの「負担」を減らすよう提案する。

これが当該記事の冒頭部分(インターネット公開)である。

『京都新聞』 参院選 選挙の現場 2022年7月10日

参院選、なぜ投票しない? 京都の有権者の声に耳を傾けてみると 10日投開票  
<https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/832742>

この記事に対する私のコメントは、

投票しない人の心理状況について、立命館大のサトウタツヤ教授（社会心理学）は「新しいことを始めるのは何事もおっくうになるのと同じで、投票が習慣化していない人は投票行動とそのための時間調整、投票先を一つに決めるという『負担』がある」という。

投票行動につなげるには、電子投票の導入や、選択を支援する施策などで「負担」を減らし、投票結果の「効果」を上げることが必要だとした上で、「政党や候補者が、年金問題など高齢者ら投票に行く人向けの公約を重視し、結果的に悪循環になっているのでは。マスコミは投票率の是非だけではなく、投票先をフラットに決められる支援にも力を入れてほしい」と語る。

というものであった。図1、図2を有権者の投票行動について当てはめて考察したものになる。有権者の行動は、投票するかしないか、であり、どちらかが実現することになる。今、投票する、を「実現しないこと」にして考えて見れば、何が投票行動を抑制したのか、何が投票しないことを促進したのか、を考えることになる。

妨害する力が強く促進する力は弱い。自分の行動（＝投票）効果の予期も弱い。こういう状況であるから投票に行かないという行動を取る人が多いことは分かるであろう（ここで、

「行かない」が行動であることを訝<sup>いぶかる</sup>る人がいるかもしれないが、行動することもしないこともいづれも行動だと考えるのが徹底的行動主義の考え方である）。

アメリカ初期の有名な心理学者であるウィリアム・ジェームズは、私たちの生活において習慣が果たす役割について述べている。彼曰く、日常行為1000のうち999までが習慣であるが、それは生得的なものではなく身につけるものである。ある行為を行う時、最初は困難であっても、次第に習熟し、習慣化される。そして、習慣は天性の10倍であるとも言っている。天性・天与<sup>ひんしつ</sup>の稟質・生得的なもの、どのような言葉でもいいが、私たちは生まれつきが大事だと思いがちなのであるが、ジェームズは、実際の習慣、情緒的習慣、知的習慣などが、略、我々を運命の方へ導いていく、と延べ、優れた習慣を身につけることが重要だとしているのである。

投票がそこまで重要なのか、ということは議論の余地があるものの、現在の日本のような民主主義国家・法治国家にとって、法律を作る国会議員を自分たちの手で選ぶことは極めて重要であるから、投票行動も重要だということになる。

現在の日本のような若者の投票離れという現象がある状態で、世間やマスコミは若者叩きをしがちであるが、ここで大事なのは投票行動を促進することである。発達心理学の言葉で言えばスキャフルディング（Scaffolding；足場かけ）、行動経済学の言葉で言えばナッジ（nudge）、記号論的文化心理学の言葉でいえば促進的記号が必要な状況となる。たとえば、決められた時間に決められた場所に行かなければ投票できないというのは極めて負荷がかかった状態であるから、それを和らげるような試みがあってもいいだろう。また、各種の投票にスタンプラリーを導入するのも良いかもしれない。市の選挙、県の選挙、国の選

挙を3つやったら、何かもらえる、的なものである。何ももらえなくてもコンプリート自体が楽しいということがあるかもしれない。

もし、投票行動が本当に大事だと思うのであれば、関係者は効果的なスキフオールディングやナッジや促進的記号については、若者自身の声を聞いて様々な政策として実行していく必要がある。

さらに、投票を抑制する候補者側の要因についても考えてみたい。まず、多数の中から一つを選ぶという選択自体が難しい。これは商品やサービスの選択にも言えることであるが、複数要素を比較して総合的に1つを選ぶことは、それが家や車のように楽しみであればともかくそうで無い場合には認知的負荷が高くなり選択自体が苦痛になると言える。選挙の場合は、争点という形で考慮すべきポイントがメディア等によってわかりやすく示されている。たとえば、2022年の参議院選挙は、公示日の『京都新聞』2022年6月22日付によれば、「物価高や安保、改憲が争点に」とのことであった。もちろんこのほかにもコロナ禍対策や社会保障や教育の問題もあるから、実に多くの論点を総合的に考えて誰か一人を選ぶ必要がでてくる。

これを候補者の視点から考えるなら、他の候補者との政策上の差異を出しながら自分への投票を促す必要がある。しかし、図5を見てほしい。『東京新聞』7月5日付に掲載された東京選挙区の二人の自民党候補者の「新型コロナ」に関する政策アンケートへの回答である。

生稲  
いづな  
あきこ  
晃子さん



#### 選択せず

新型コロナは致死率や重症化率が高く、さらなる変異の可能性もあり、5類にすると、入院措置をはじめ健康状態の報告・把握、外出自粛等の要請ができなくなります。今後の状況等を踏まえつつ、適切に対応していきます

朝日  
あさひ  
けんたろう  
健太郎さん



#### ②

新型コロナは致死率や重症化率が高く、さらなる変異の可能性もあり5類にすると入院の措置をはじめ健康状態の報告・把握・外出自粛等の要請ができなくなってしまふ。今後の状況等を踏まえつつ適切な対応をすべきだ

## 図5 二人の自民党候補者の政策アンケートへの回答

<https://lifesomeplive88.com/talent/7236/>

これをコピペと言わずして何というのか？おそらくは自民党関係者が作ったひな形を流したため二人の回答が似てしまったのだろうが、このようなことを大学のレポートでやったら大変なことになる。このようなコピペ回答をみた大学生の有権者がしらけてしまうのは当然のことであろう。

このほか、以下では候補者の政策表明の不誠実さとして「無回答」問題を取り上げてみたい。具体的には、選択的夫婦別姓、同性婚への態度について見ていこう。サイボウズ社長の青野慶久氏が運営する「夫婦別姓・ヤシノミ作戦」；<https://yashino.me/s2022/>」にこの二つについての賛否の回答がまとめられているので参考になる。地方区49名の自民党候補者のうち、選択的夫婦別姓及び同性婚に対する質問に無回答だった者が32.7%、前者のみ無回答が14.3%、後者のみ無回答が22.4%であった。つまり、少なくともどちらかの問いに無回答だった候補者が約7割という驚愕の結果であった。どのような論点であっても意見は賛否あって良いし、それを選挙の有権者に訴えることについて現状の日本での問題点はない。夫婦の姓について言えば、現行法の制度を残したいという人（夫婦同姓）がいること自体に問題はないし、現行法を変えたいという人（選択的夫婦別姓もしくは夫婦別姓）がいることにも問題はない。その政策について有権者が判断すれば良いのである。しかし、今回の集計からは、政権を担う政党の立候補者のうち7割の候補者が態度を明らかにしていなかったことが明らかになっている。こうしたことは大きな問題であろう。

さて、これらの問いに対して無回答である理由は、「本来、選択的夫婦別姓、同性婚に反対だが、それを表明すると問題になる」から無回答にしていると考えられがちであったが（上記、ヤシノミ作戦ではこの立場を取っているようだ）、分析してみると必ずしもそうではなく、「本来、選択的夫婦別姓、同性婚に賛成だが、それを表明すると問題になる」から無回答にしている候補者が少なからずいることが推定された。いずれにせよ、不誠実であることには変わりがない。若者の関心が高いこの手の話題について、無回答を許すようなことで良いのか、考え直す必要がある。若者に関心の高い論点への意見を表明しない候補者が多いことは、若者の関心をそぐ結果になっていることは明かであろう。

若者が投票に行かないことが問題なのか、若者が投票に行かない環境を作っていることが問題なのか、筆者は前者だけということはある得ないとする。メディアは後者の可能性についてもしっかりと考えて報道してほしい。

付記・長らく連載を続けてきたが、50号を区切りに『対人援助学マガジン』を卒業します。ご愛読、ありがとうございました（本誌本号の近況報告を参照）。

## 文献

木戸彩恵・サトウタツヤ 2019 文化心理学 ちとせプレス

サトウタツヤ 2021 対人援助学&心理学の縦横無尽(31) 対人援助学マガジン, 46, 97-99.

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol46/14.pdf>

安田裕子・サトウタツヤ 2022 TEA による対人援助プロセスと分岐の記述 誠信書房

## 新聞記事等

『京都新聞』 参院選 選挙の現場 2022年7月6日

握手自粛「グータッチ」で票はつかめる? 京都・滋賀の候補者の受け止めは

<https://www.kyoto-np.co.jp/articles/gallery/829474>

『京都新聞』 参院選 選挙の現場 2022年7月10日

参院選、なぜ投票しない? 京都の有権者の声に耳を傾けてみると 10日投開票

<https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/832742>

夫婦別姓・ヤシノミ作戦 <https://yashino.me/s2022/>